

2024年  
1月3回号  
(C週)  
大寒

# 産直365



## 特集

### これからの「担い手」のカタチ。

Contents.

エコ・人参  
おまかせ有機野菜セット  
エコ・新潟こしひかり(玄米)



(左)「しいのみ」のみなさんの袋詰め作業のようす  
(右)「やさと菜苑」が手掛ける人参畑

## 農業福祉でみんなが嬉しい!



規格(重さと本数)を書いたボードを手元に置き、間違いがないように確認しながら作業します

### 助け合いから始まる 新しい可能性

「石岡市は農業が盛んな地域ですが、生産者の高齢化や担い手不足により、十数年前から耕作放棄地が増加してしまいました。今後さらに問題が深刻化するだろうと考え、私たちJAが直接農地の担い手になるべく立ち上げたのが、「やさと菜苑」です」

そう話すのは、産直産地「JAやさ」との子会社として運営する農業生産法人「やさと菜苑(株)」の代表・前島雄一郎さん。設立して12年、現在は16名のスタッフで、約16haの農地を管理しています。

しかし16haもの面積となると、作業が重なる時は人手に困ることもあるので、早くから「そこは『しいのみ』の方々が、すぐく助けになっていきます」と前島さんは笑顔を見せます。

やさと菜苑は3年前から、障がい者の就労支援に取り組むNPO法人「どんぐりころころしいのみ」との連携を始めました。同法人の谷島かおりさんは、「もともとは自分たちで農場をやりたいなと思っていたんですが、うちの理事長(元JA職員)の助言を受

け、やさと菜苑と連携することにしたんです」とその経緯を振り返ります。

「小松菜の袋詰めから始まり、やっていこううちに利用者さんも作物への興味が出たのか、『畑の作業もしてみたい』と言う方が出てきて。今は草とりや種まきなど、手伝っています。始めるころはなかなか終わらなかつたんですが、今は早いぶん早くできるようになりましたよ(谷島さん)」

実際に人参と小松菜の袋詰め作業を見学すると、計量する人、袋に詰める人、封をする人、数を確認しながら出荷コンテナに詰める人……と、とても細かく分担していることに気が付きます。

「ひとくりに障がい者といっても、できる作業や向いている作業はみなさんそれぞれ違うんです。正確に数を数えるのが得意だったり、ていねいな袋詰めが得意だったり。ほかにも農業はやるのが多岐にわたっているから、一人ひとりに合った仕事を提供できるという意味で、いろいろなチャ

### episode 1. JAやさと (茨城県)

茨城県石岡市に位置する、筑波山系に囲まれた自然豊かな産地。1997年に有機栽培部会を発足するなど、長年にわたり環境保全型農業に取り組んでいます。2012年に、地域農業活性化や有機栽培以外の就農支援を目的とした農業生産法人「やさと菜苑」を設立。3年前からNPO法人「どんぐりころころしいのみ」との農福連携をすすめています。



コトコト 324  
きなり 281  
きなりセレクト 342122

エコ・人参

700g 189円(税込204円)

各産地で栽培基準を話し合い農業使用を抑え、環境に配慮した栽培に挑戦。泥付きまたは洗いでお届け。

### 取材した人

前島 雄一郎 さん

2023年4月より、JAやさとから出向する方たちで「やさと菜苑(株)」の代表を務める。



### 取材した人

谷島 かおり さん

NPO法人「どんぐりころころしいのみ」管理者。日々、利用者のサポートに励む。



(写真/豊島正直、文/西谷真実)

「将来的には、当初思い描いていたしいのみでの野菜作りや加工品にも挑戦したいとのこと。『農』を中心とした連携の輪は、今後もっと大きく広がっていきそうです。」

「その日の気持ちや体調に合わせて、外の作業と室内の作業を選べることも助かっていると話す谷島さん。袋詰め作業が終わると、利用者の方から『終わったー!』と達成感に満ちた声と笑顔がこぼれます。」



### 畑のまわりは笑顔いっぱい

(上)2023年は夏の猛暑が人にも作物にもおそろしくかかりましたが、立派なさつまいもを取れました。(右)規格外の野菜は、グループホームでの食事のほか、直売所で販売する加工品・お菓子にも活用。じつは二階堂さんの娘さんが中心となって、「夢のカタチふぁーむ」の野菜を使ったカフェを開く予定なのだとか。(写真:産地提供)



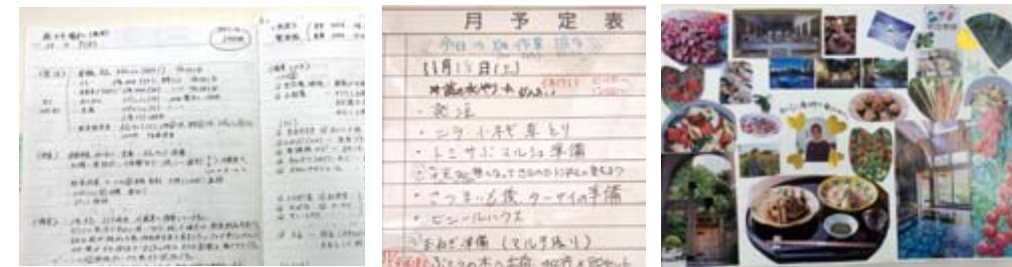
## 「夢のカタチふぁーむ」の 協働の日々

野菜の栽培経験者ゼロで始動した「夢のカタチふぁーむ」。当初は車とり水やりも「過期」がわからず苦戦を続けていたそうですが、7年目の今、畑には豊かな実りと満開の笑顔が咲いています。



### 始まりのソーラーシェアリング

「ちば風土の会」が所有する太陽光発電パネル。同産地がこのパネルの下で営農する新規就農者を探していたところ、「夢のカタチ」と縁が結ばれたそうです。今もここは大切な畑の一部。夏にはブルーベリーがたわわに実ります。



### 作業のコツは 「見える化」にある

(左)栽培を軌道にのせるうえで役立つもののひとつが、ていねいな栽培記録。その日の作業を詳細に記録し、次の栽培につなげています。(中央)作業場のホワイトボードにはその日の作業をわかりやすく掲示し、全員で目標を共有します。(右)モチベーションの維持に欠かせない「ビジョンボード」。実現したい夢と、必要なステップを明確にすることで、大変な作業もがんばれるそうです。(写真:産地提供)



高品質ポイント +50  
コトコト きなり きなりセレクト  
306 308 342041

### おまかせ有機野菜セット

8品 1,528円(税込1,650円)

生産者が選ぶ旬の有機野菜で1週間過ごせるセットです。有機栽培または転換期間中有機栽培。

### 有機野菜セットには畑の「今」が詰まっています

#### 旬の野菜を詰め合わせ

季節折々の旬の野菜を、出荷時の収穫量などに合わせてセット。野菜についての土の香りまで、畑の恵みそのままの姿を楽しめます。

#### 生産者からのお便り付き

ときにはちよっとめずらしい野菜が入ることも。セットに同梱するお便りや、レシピや食べ方も紹介しているので参考にしてください。

#### 産地の応援につながります

定期お届けの「バルくる便」なら、産地はより安定した栽培計画を立てられるため、安心して有機農業に取り組みます。

バルくる便「おまかせ有機野菜セット 8品」

毎週【096717】 隔週【086711】 ※登録した週から毎週または隔週、定期的にお届けします



#### 取材した人

##### 二階堂 すみ子さん

鹿児島県徳之島のサトウキビ農家に生まれ育つ。19歳で鹿児島を離れ、上京。障がい者の就労継続支援A型事業所に勤務したのち、家族の反対を押し切って2016年に「(株)夢のカタチ」を起業、グループホーム事業を開始。翌年から「ちば風土の会」との連携をスタートし、2019年にNPO法人「夢のカタチふぁーむ」を設立。

「夢のカタチ」に畑を貸し、当初から栽培の助言をしてきたという「ちば風土の会」代表・寺内金一さん

## column

## もっと知りたい! 課題解決の、その先へ。「農福連携」の取り組み。

### そもそも「農福連携」とは?

農水省では「農福連携とは、障がい者等の農業分野での活躍を通じて、自信や生きがいを創出し、社会参画を促す取り組み」と定義されています。「農」は必ずしも農産物の生産に限らず、第一次産業全般や第6次産業(加工品製造)までを広く含み、「福祉」は障がい者だけでなく、高齢者、生活困窮者、ひきこもり状態にあるなど社会的な生きづらさを抱える多様な人々を含んでいます。

### 「助かる」以上の相乗効果も

今回紹介したふたつの産地のように、連携のあり方は多種多様。基本的には農業が抱える「担い手不足」「農地維持」の課題と、福祉が抱える「就労先の確保」「工賃の引き上げ」を同時に解決する、Win-Winの関係をめざしています。誰もが働きやすいように作業の指示や分担を考え直したことで生産効率が上がったというケースもあるように、「どのよう」に連携するかも、重要なポイントになっています。

### パルシステムの「地域づくり基金」が農福連携の現場にも役立っています

パルシステムでは、組合員の商品利用などにより生まれる剰余金を「地域づくり基金」として積み立て、各地で活躍する「パルシステムと関連のある生産者やメーカー、地域活動団体の事業」を応援しています。2022年度には「夢のカタチふぁーむ」を助成。休憩所や事務所として使うコンテナハウスなどに活用されました。



「夢のカタチふぁーむ」の取り組みを紹介する動画はコチラ



一人ひとりの自立をめざして  
成田空港から車で約20分ほどの距離に位置する、千葉県富里市。有機野菜の産直産地としておなじみ「ちば風土の会」と連携する、「夢のカタチふぁーむ」を訪ねました。  
「夢のカタチふぁーむ」は、障がいをもつ人々の自立をめざし、グループホームの運営や就労支援などを担う「(株)夢のカタチ」による有機農場です。安価な工賃しか得られない内職作業だけでは自立が難しいことから、2017年に「ちば風土の会」との連携をスタートしました。  
現在は年間約60品目を手付け、地域の直売所やレストラン、都内のマルシェなどさまざまな場所に出荷。ちば風土の会からお届けする「おまかせ有機野菜セット」にも、毎週1〜2品を出しています。  
「一般的な農福連携は、農家のもとに福祉施設の方に来て、一定時間お手伝いで作業をして」というかたち。ここはそうじゃない、障がいがあるうとなかなか、働く人すべてが自立をめざしている。だから自分は「連携」ではなく「協働」と言いたいんです。  
そう話すのは、ちば風土の会の事務局を務める山下司郎さん。夢のカタチの代表・二階堂すみ子さんが描く「自立」のビジョンに共感したことが、縁をつなぐ決め手になったそうです。  
二階堂さんに案内された農場では、思わず仲間に入れてほしいような、和気あいあいとした雰囲気で作業がすすんでいました。時折声をかけながら、二階堂さんはそのようすを温かく見守ります。  
「みんなで作るので、大変さもありますけど、けっこう楽しいんですよ。最初のころはずっといっしょについていましたが、今はみんなできることが増えて、ある程度は任せています」  
発達障がい、身体障がい、自閉傾向など利用者のバックグラウンドはさまざまですが、農業をやっていくうちに、みんなどんどん元気になるんです」と二階堂さんは笑顔を見せます。  
「体力や集中力が身につくにつれてやれることが増えてきたり、作業を通して積極的にコミュニケーションをとれるようになったり。心の病気で薬の服用が欠かせなかった方が、だんだん薬が減り、要らなくなるほどになったケースもあります。時間はかかりましたが、作業も速くなったし、草とりもすつこくきれいにやれるようになったんですよ」

誰もが得意を活かせる社会に  
「畑を始めてから、「ちば風土の会」のみなさんはもちろん、いろいろな方と関わりができて、すこよかったなと。内職だけでは地域の人と関わりようもないので、そういった意味でも、農業には大きな可能性を感じています(二階堂さん)」  
夢のカタチふぁーむでは「作って売る」だけでなく、収穫体験や交流活動も積極的に受け入れ、着実に地域での居場所を確立していつていきます。つい先日も地域の高校生が体験に訪れたそうです。二階堂さんとは、事前にひとつだけお願いをしたのだといいます。それは「障がい者という言葉を使わない」ということ。  
「私も日々気を付けているんですが、接する側が過度に意識すると、「この人はこの作業はできないから」と可能性を狭めてしまうことがあるんです。本人たちはそういうことを意識せずに働いている。だから来る人たちにも先入観をもち、ひとりの人として接してほしい、とお伝えしました」  
ちば風土の会の代表・寺内金一さんも「知ると構えちゃうもね」とうなずきます。二階堂さんは「そうなんです、自らの経験を交えて話します」  
「私には聴覚障がいの叔父がいるんですが、私にとってははずっと、叔父は叔父だった。そうやってフラットな感覚で育ってきたので、社会に出て、障がいの方たちが学校も職も分断されていることに違和感があったんですよね」  
得意不得意があるのはみな同じ。不得意にはばかり注目し、「障がい者」とラベリングする必要はあるのだろうか。二階堂さんは静かに熱を込めます。  
「日本の教育だと不得意なことがひとつあるだけで「できない子」のレッテルを張られて、本人も自信をなくしてしまう。これってすこくもったいない。それよりも一人ひとりの能力を、最大限に生かせる環境をつくるのが重要なんじゃないかな。得意なことをどんどん伸ばしていったほうが、社会もきつと、おもしろくなると思うんです」  
二階堂さんの想いは広く伝播し、現在は「夢のカタチ」に関連した事業に家族全員が関わっているほか、県内外からの視察も相次いでいます。取り組みが全国に広がれば、そう遠くない未来に、社会も変わっていくかもしれません。  
(写真/豊島直正、文/西谷真実)

# 頸北のパイオニア精神で 逆境も乗り越えてみせる!



episode 3.

## JAえちご上越 (新潟県)

新潟県南西部の「高田平野」に位置。60名を超える会員が所属する「頸北(けいほく)エコ米研究会」をはじめ、さまざまな組織で生産者同士学び合いながら米作りに取り組んでいます。また、米作りだけでなく「バケツ稲」体験や田植え・稲刈り体験など、交流活動にも積極的な産地です。



パルシステム東京の組合員との稲刈り体験交流のようす



田植え体験のときのおやつ時間のようす。柳澤さんの会社で作った笹団子がふるまわれました

### 取材した人

おおたき かずひろ  
大滝 和弘 さん

1981年生まれ。反発する気持ちも抱えつつ、24歳で就農。父親が近隣2軒の農家とともに設立した農業生産法人を継ぐ。「就職」というかたちで農業を志す若い世代に選んでもらえる職場になるよう、繁忙期も休みがとれるようにしたり、稲刈り後に独自の連休を設定したり、働き方改革に取り組んでいる。



### 取材した人

やなぎさわ よしたか  
柳澤 嘉孝 さん

1983年生まれ。22歳で就農し、現在は家族で環境保全型の米作りに取り組みながら、農業法人での加工品作りも担う。田植え・稲刈り体験での「こびり(おやつ)」の笹団子も提供。

## いち早く始まった法人経営

11月初旬。稲刈りが終わりすっきり静かになった田んぼを眺めながら、新潟県上越市頸北地域の「JAえちご上越」を訪ねました。次の春まで、穏やかな時間が流れるばかり……と思いきや、生産者の大滝和弘さんは「いやあ、意外とやることはいっぱいあるんです」と笑います。

「冬季の収入源になる野菜作り、何種類もの機械の掃除やメンテナンス、そして12月には翌年の(米の)種の準備が始まります。あと重要なのは、春からの米作りに向けた、前年の振り返り。この『考える時間』をどれだけとれるかが、組織の成長に大きく関わるんです」

大滝さんは、父親が近隣2軒の農家と共同で立ち上げた農業生産法人の代表。社員6名、パートタイム2名、繁忙期は短期雇用もしながら、米だけで80ha以上の作付けを行っています。

会社の設立から約30年。近年は全国的にも大規模の法人経営に転換する生産者が増えてきましたが、大滝さんの父親たちは団塊の世代が働き盛りだったころから、将来的な農村維持の危機を見据えていたのだといいます。

「設立当時、ここの集落で20軒くらいいた米農家が、今やうちを含めてたった2軒。米作りを引退する人たちが『うちの田んぼも管理してくれないか』と頼まれて、あれよあれよと4倍の規模になりました」

ただ、法人化の理由は「地域のため」だけではなかったとか。「有志が集まってたくさん作って売って、稼げる農家になるぞ!という、株式会社のような考えがベースにあったんです」と、大滝さんは明るい表情で続けます。

「より稼ぐためによりよいものを作る、そのためには何が必要なのか——親父の代からほかの生産者たちと活発に情報交換をして、新しいことにもどんどん挑戦してます」

驚くことに、頸北地域内ではほかにも同時期に会社を興した人や、もともと早くから法人経営していた農家もいるのだそうです。家族経営の米作りと並行し、法人で加工品製造を行う柳澤嘉孝さんも、父親たちが会社を作ったのは38年前のこと。

「そのころ、冬はみんな仕事がないから出稼ぎに行っていた。地元での働く場所をということで始めた会社だったと聞いています」(柳澤さん)

大滝さんは「頸北地域は昔から、新しい取り組みの先陣を切るようなところがあつたんですよ」と、誇らしげに胸を張ります。

## 課題は山積、それでも前を向く

その頼もしさの一方で、近年の米価の落ち込みとコスト高騰が、若手生産者の大きな足かせになっています。

「23年産の米価は『上がった』といわれていますが、生産者から見れば『ある程度戻った』という感覚。昔は一俵(約60kg)2万円台、20年前前は1万7千円、今は約1万4千円。今後もっと離農する人が増えることを考えると、設備投資をして手放される田んぼを引き受けられる体制を整えておきたいけど、それも難しい状況です」(大滝さん)

さらに23年産は、夏の猛暑と深刻な雨不足の影響で、稲が枯れたりシラタ米が多く発生してしまったりというショックもありました。大滝さんの耳には、これを機に離農を検討する生産者の声も届いているといいます。

また、長年大きな課題なのが繁忙

期の人手の確保。柳澤さんも「欲しいときだけ人を集めるというのが厳しくなっています」と話します。

「もち作りのピークには30名ほど雇うのですが、かつて来てくれていた地元の方は、みなさん高齢になって体力的に難しい。今は何とかなっています。経営を考え直すタイミングかなと感じています」

しかし逆風のなかでもふたりの目に陰りはありません。

「パルシステムとの交流会に、俺たちはあえて若手を集めていって『ほかにも若いやつがたくさんいるんで、うちの産地はまだ大丈夫です!』って話すんです。だから安心して、『新潟こしひかり』を食べ続けてもらえるとうれしいです」(大滝さん)

受け継がれるパイオニア精神、世代を超えて培ってきた仲間たちとの絆。そしてバイタリティーあふれる下の世代の姿が、ぐっと背中を押してくれているようです。

(写真/豊島正直、文/西谷真実)

2023年は夏の猛暑と深刻な水不足の影響を大きく受けました。「JAえちご上越」管内では、水源が枯れて田んぼがひび割れるほど乾き、稲が枯れてしまったところも。高温障害で粒が白くなる「シラタ米」や粒の大きさがばらつきが例年よりも多く発生していますが、食味に影響はありません。



特別価格

コトコト 643 5kg  
 きなり 330 5kg  
 きなりセレクト 343889 5kg

エコ・新潟こしひかり(玄米)  
 5kg 2,130円(税込2,300円)

JAえちご上越より。玄米には、ビタミン、ミネラルが多く含まれています。一晩を目安に水に浸して炊飯してください。